

# 旭川医科大学図書館改革のグランドデザイン

～「競争的環境の中で個性輝く図書館」を目指して～

平成20年3月 旭川医科大学 図書館委員会

## 目次

### グランドデザイン策定に当たっての基本的視座

#### 大学図書館全般の課題

- 文部科学省からの関連政策文書をもとに -
- 大学図書館関連の文献に学ぶ今後の指針
- 本学図書館に期待される学生支援の具体例
- 本学教育改革グランドデザインをもとに -
- 利用者アンケートの結果から探る本学図書館の現状と課題

#### 改革のグランドデザイン

- (1) 改革の規模・経費と優先順位
- (2) 施設・設備・利用環境の充実・向上
  - 閲覧・学習スペースの充実
  - グループ学習スペースの充実
  - 検索用パソコンの充実
  - 書庫スペースの確保
  - 衛生環境の一層の向上
- (3) 図書資料の充実
  - 学生用図書資料の充実
    - ) 学生用参考図書・学生購入希望図書などの充実
    - ) 新書・文庫などの廉価本の充実による新情報・新知見のスピーディな提供
    - ) 地域医療書コーナーの整備・充実
    - ) 選書ポリシーの確立
  - 研究者用電子資料の充実
    - ) 電子ジャーナルの充実
    - ) 学術データベースの充実
- (4) サービス・広報活動の充実
  - 図書館利用規程等の検討
  - 利用者モラル向上のための啓発と新たなペナルティの検討
  - 図書館スタッフによるリテラシー教育の充実
  - 展示事業の推進
  - ホームページなど図書館ポータルの充実
  - その他の図書館サービスの検討
- (5) 地域連携の推進
  - 地域医療機関への文献情報提供の充実
  - 地域医療従事者への24時間開放の推進
  - 旭川市図書館との連携
- (6) その他
  - 学術成果リポジトリ(AMCoR)の充実
  - 図書館職員の研修・研鑽の充実

#### まとめ

## グランドデザイン策定に当たっての基本的視座

朝日新聞社発行の『大学ランキング』2008年版によれば、旭川医科大学（以下「本学」）図書館は設備・蔵書等の観点から、上位3割以内に該当するとしてAランクと評価されている。この評価は同書の初版からずっと変わっていない。しかし、「競争的環境の中で個性輝く大学」（平成10年大学審議会答申より）として本学が生き残っていくためには、図書館もこの評価に甘んじることなく、さまざまな面にわたって不断に改革していくことが肝要である。

とはいえ、場当たりの改革は許されない。改革にはきちんとしたグランドデザインが必要である。その策定に当たっては、日本の大学図書館全般が直面している現状と喫緊の課題、本学独自の教育・研究の目標や方針、本学図書館利用者から寄せられた意見や要望などを集約したうえで、サービスや環境のあるべき姿を考える必要がある。とりわけ、大学図書館に関する文部科学省の最近の政策文書（答申）、図書館情報学の専門家や大学図書館職員が執筆した最新の書籍、本学が先般策定した教育改革のグランドデザイン等の内容を十分に踏まえ、さらに、本学の学生・教職員等を対象として大規模に実施した最新のアンケート調査（平成19年11月）の結果を尊重すべきである。

これらを十分に踏まえつつ、本学図書館のサービスと環境の改善を図り、利用者の学習・教育と研究・診療の一層の推進に資することを旨として、改革のグランドデザインをここに策定した。

### 大学図書館全般の課題 - 文部科学省からの関連政策文書をもとに -

#### (1) 「学術情報基盤の今後の在り方について（報告）」（平成18年3月23日）

本報告は、学術情報基盤を「コンピュータ等の設備、基盤のソフトウェア、コンテンツ及びデータベース、人材、研究グループそのものを超高速ネットワークの上で共有する」ための基盤と位置付け、その整備の一環として、コンピュータ・ネットワークや大学図書館の基本的な在り方について触れている。特に大学図書館に関しては次の4点が強調されている。

学術情報基盤は学術研究活動に不可欠なライフラインであり、最先端学術情報基盤の早期実現が重要である。

図書館が大学の教育研究活動を支える重要な学術基盤であるということを学内で明確に位置づけ、共通経費化等の推進により安定的な財政基盤を確立することが必要である。

電子化の急速な進展、オープンアクセス運動など、学術情報基盤を取り巻く環境が急速に変化しつつあり、これらに積極的に対応する必要がある。そのためにも、機関リポジトリへの積極的な取り組みが重要であり、さらに、ハイブリッドライブラリー（電子情報と紙媒体を有機的に結び付けた諸機能を持つ図書館）の実現が求められる。

学術情報基盤が今後とも充実・発展していくためには、これを支える図書館職員等の人材が重要である。

#### (2) 「第3期科学技術基本計画（平成18年度～22年度）」（平成18年3月28日）

本計画の第3章「科学技術システム改革」で研究情報基盤の整備について触れているが、特に大学図書館に関わる計画として、次の3点が挙げられている。

論文等の書誌情報と特許情報の統合検索システムの整備

大学図書館・国立国会図書館等の機能強化

電子アーカイブ化支援

#### (3) 「学術情報の流通基盤の充実について（審議のまとめ）」（平成14年3月12日）

本報告には、大学図書館における電子化と情報発信機能の充実とを基本とした政策の推進の重要性について記述されている。

#### (4) 「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について（建議）」（平成8年7月29日）

本建議には大学図書館の電子化を基本とした政策の推進について記述されているが、「利用者教育は、情報リテラシー教育の一環として、大学図書館の協力の下に、全学的に取り組むことができるよう、教育体制の整備が必要である」と学術情報リテラシー教育の在り方についても記述されている。

## 大学図書館関連の文献に学ぶ今後の指針

本グランドデザイン策定に当たり参照した文献は次の7点であり、いずれも大学図書館・公共図書館の現状と課題に鋭く斬り込んでいる。

- 『変わりゆく大学図書館』（逸村裕・竹内比呂也編、勁草書房、平成17年）
- 『図書館の可能性』（大串夏身著、青弓社、平成19年）
- 『学術情報流通と大学図書館』（日本図書館情報学会研究委員会編、勉誠出版、平成19年）
- 『大学図書館の挑戦』（田坂憲二著、和泉書院、平成18年）
- 『学術情報流通とオープンアクセス』（倉田敬子著、勁草書房、平成19年）
- 『図書館は本をどう選ぶか』（安井一徳著、勁草書房、平成18年）
- 『新版 図書館の発見』（前川恒雄・石井敦著、日本放送出版協会、平成18年）

これらの中で言及されているさまざまな事項のうち、特に次の指摘が重要であると考えられる。

### （１）『変わりゆく大学図書館』より

本書の骨子は、以下の6点にまとめられる。

我が国の大学図書館は、この四半世紀、（ ）学術情報システム構想、（ ）電子図書館的機能の充実・強化、に代表される電子化政策を進めてきた。資料電子化の代表である電子ジャーナルの導入により雑誌利用の利便性は高まってきたが、反面、財政面で問題を惹起し、電子的資料と印刷体資料との融合を図るべきハイブリッドライブラリーの実現が模索されつつある。

大学改革の中で図書館は、教育・研究機能が益々高まり、伝統的に図書館の内部文脈で行ってきた利用者教育が、学術情報リテラシーとして、図書館の外部的文脈との関わりを強くして位置付けられてきている。今後は、大学政策に沿った上で、授業（教員）と図書館（図書館職員）との協働作業がより必要となってくる。

図書館ポータルには、その代表例として図書館Webページがあるが、全ての図書館サービスの入口として、情報チャンネルにより、図書館関連資料等の情報源への外部からのアクセス機能が十分に装備されているものが求められている。

学術機関リポジトリは、大学の情報発信の充実および学術コミュニケーション危機の打開のために、大学図書館が積極的に取り組むべきことである。他方、同リポジトリは、大学で生産された学術情報の一元的窓口として機能し、そのことによって社会への説明責任を果たすことができ、大学の知名度を上げることもできる。その構築や運用を進めてゆくに当たっては、品質管理の維持、学内構成者への投稿促進、著作権に関わる問題の解決等が求められる。

我が国の大学図書館に電子ジャーナルが本格的に導入されたのは、平成14（2002）年に国立大学図書館協会に電子ジャーナルタスクフォースが設置されてからである。外国出版社との契約・価格協議を通して国立大学法人は、通常より有利な条件で電子ジャーナルを利用できる。価格の年間平均上昇率約10%は効率化係数1%を課せられる大学予算を直撃するものではあるが、電子ジャーナルは教育・研究のための不可欠な学術情報源である。国内雑誌の電子ジャーナル化や電子図書（e-BOOK）の普及も着々と進行している。地域連携は現代の大学に不可欠である。大学図書館の中には、大学構成員の学習・教育と研究を支援するだけでなく、地域社会への開放を推進する事例も見られるようになっている。例えば九州大学や三重大学では、公共図書館と協力関係を結ぶことにより地域に根ざした大学作りを目指している。

### （２）『図書館の可能性』より

本書の特に第4章「大学図書館のあり方に関して」には、大学図書館の在り方に関する基本的な視点が提示されている。それは次の8点である。

- 建学の精神、あるいは大学設置の目的・理念
- 大学図書館が置かれている地理的な場所
- 大学の学部・学科構成
- 知識の生産、大学の学術研究のレベル
- 学生の自主学習の支援      情報活用能力の向上
- 利用者の要求
- 学術情報環境の変化

## 地域社会への貢献

ちなみに本学にこれらの視点を当てはめると、本学の最大の目的が北海道の地域医療の充実に貢献する意欲を持つ学生の獲得・育成にある以上、図書館が第一に心がけるべき点は、この目的に沿っての学生の学習活動、教職員の教育活動の支援である。その支援基盤の本格的な整備充実のためには今後10年ほどを要すると思われるが、当面の約5年間は、学習する学生の要望と教育する教職員の要望との中で緊急性と利便性の高いものを重視した図書館作り（具体的には施設・設備・図書資料などの充実）が重要となろう。第二に心がけるべき点は、教職員の多くが研究・診療にも携わっていることから、研究・診療を十分にサポートできる学術雑誌（その多くは電子ジャーナル）および学術データベースのコレクション構築である。このように、学生・教育者の観点からの優先課題と、研究者・診療者の観点からの優先課題とをともに踏まえ、いずれにも偏しないバランスの取れたグランドデザインを策定する必要がある。

### （3）『学術情報流通と大学図書館』より

本書は、上記『図書館の可能性』第4章に提示されている大学図書館の在り方に関する基本的な視点のうち、ここ数年で進境著しい学術情報環境、とりわけ学術情報流通の電子化を主題としている。

第一部で「学術情報流通の現況」を概観し、第二部では、「日本における学術情報流通基盤整備に向けての活動」と題して、次世代学術コンテンツ基盤の構築を説いている。それらを受けて第三部では、「大学図書館の役割と課題」と題して、機関リポジトリとOPAC（Online Public Access Catalog：図書館蔵書検索システム）の充実を力説している。

### （4）『大学図書館の挑戦』より

著者は公立福岡女子大学の図書館長であり、同大学は本学と同様な小規模単科大学である。その図書館改革の実践は本学にとって大いに参考になる。著者は館長就任後、一層充実した使いやすい図書館にするためにさまざまな試みを実践してきた。例えば、規模を20冊程度に、期間を2ヶ月程度に限定してタイムリーな話題で学生や教職員に親しまれるような図書館所蔵貴重資料の展示を行い、好評を博した。本書にはその他、図書館利用者教育の充実など身近な利用者サービスに目を向け、わずかでも工夫を凝らして図書館をアピールしようと努力し成功した事例が満載されている。どんな企画にせよ図書館長自らがリーダーシップを発揮して実行することが大切であると力説されている。

## 本学図書館に期待される学生支援の具体例

### - 本学教育改革のグランドデザインをもとに -

本学は平成19（2007）年11月に「旭川医科大学教育改革のグランドデザイン」を策定した。本グランドデザインは、平成21年4月入学者から適用されるカリキュラムの策定に向けて、平成20年1月から本格化するカリキュラム改革の基本方針がうたわれている。この基本方針は今般の図書館改革とも有機的に連動させるべきものである。特に次の4点は、学生の学習活動と教員の教育活動を支援するために今後の本学図書館に大きく期待される点であると思われる。

当該グランドデザインの随所に現れる「地域社会への貢献」「地域医療」「医療過疎の解消」などは、本学の教育の最重要方針を象徴する重要キーワードである。図書館が平成19（2007）年10月に設置した「地域医療書コーナー」の整備と一層の充実が、今後も、学生が当該学習を進めモチベーションを高めるうえで極めて有効であると思われる。

当該グランドデザインには、医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議の「第一次報告」および「最終報告」との関連で「腫瘍に関する体系的教育」の推進がうたわれているが、この領域の学習・教育支援のためには、有効な予算措置を行って、腫瘍に関する学習用・教育用図書を質・量ともに充実させる必要がある。

当該グランドデザインでは、ファカルティ・デベロップメント（FD）の全学的実施体制を構築しその充実を図ることや学生にグローバル化や科学技術進展など社会の激しい変化に対応し得る統合された知の基盤を与えることが強調されているが、これらを強力に推進するためには、図書館職員による学術情報リテラシー教育の充実が不可欠である。

当該グランドデザインでは実用英語教育・医学英語教育の強化がうたわれているが、学生の英語学習を支援

するために、この分野の視聴覚用機材・教材（ビデオ、CD、DVDなど）の充実が望まれる。

### 利用者アンケートの結果から探る本学図書館の現状と課題

本学図書館では平成19（2007）年11月に本学関係者（学生、大学院生、教員、医員・研修医、看護職員、事務職員など）に対し大規模なアンケート調査を実施した。回答者は約1400名で、全体の回収率は約56パーセントであったが、学生に限ると、回収率は90パーセント以上にのぼり、この種のアンケートとしては異例の高さで、図書館改革への関心の高さをうかがわせた。

アンケート調査票とその集計結果は「旭川医科大学図書館利用者アンケート2007集計報告」のとおりであり、本学図書館ホームページで公開している。詳細な分析結果は、図書館情報課で保管する。分析は主として、回答者の所属別に（A）医学科学生、（B）看護学科学生、（C）研究者（教員・大学院生）、（D）病院看護職員、（E）その他の職員、に大別して行った。

図書館利用者アンケートの集計結果から、本学図書館の現状を特徴付ける結果を以下にピックアップした。なお、結果説明文中の項目である「2（図書利用）」や「9（勉強）」などはアンケートにおける回答選択肢を表す。

図書館を利用する目的について<問2から>

AとBは、2（図書利用）9（勉強）7（PC利用）1（雑誌利用）の順で多い。CとDは、1（雑誌利用）2（図書利用）6（文献申込）の順となっている。

図書館の利用頻度について<問3から>

1（毎日）または2（週1・2）と回答しているのは、Aが63%、Bが32%、Cが22%となっている。

電子ジャーナル使用頻度について<問5から>

1（毎日）または2（週1・2）と回答しているのは、AとBが10%、Cが64%、Dが3%などとなっている。

図書館ホームページの利用目的について<問10から>

AとBは、4（蔵書検索）、3（電子ジャーナル）、6（学術文献情報）の順で多い。C・Dは、3（電子ジャーナル）、4（蔵書検索）、6（学術文献情報）の順となっている。

図書館に最も取り組んでほしいことについて<問19から>

AとBは、図書資料の整備（17%）、冷暖房完備（16%）、座席の増加（13%）、パソコンの増設（9%）、セミナー室の整備・増設（8%）の順となっている。C、DとEは、図書資料の整備、冷暖房完備、電子ジャーナルの充実、学術データベースの充実、座席の増加の順となっている。

本学図書館を頻繁に利用していると回答した者はA、B、Cに多かったことから、以下、これらの者の回答を中心に、その要望・意見を要約していく。その意見・要望の内容は多岐にわたっており、事実誤認の意見・要望も若干あったが、大半は真面目な回答であり、そのうち、とりわけ早急に検討し改善していくべき点として、次の各項を指摘することができる。グランドデザインの策定に当たっては、特にこれらの意見・要望を十分に踏まえる必要がある。

以下は、図書館が取り組むべきこと<問19>、公共図書館との比較<問20>に対する意見や全般的な自由意見・要望<問21>の中から同一意見や代表的なものを集約したものである。

#### （1）図書館の全体的な雰囲気について

学生の中には「開放感がなく気軽に入りにくい」と感じている者が少なくなかった。

#### （2）図書資料の内容について

全体的に、「図書全般を増やしてほしい」と望む利用者が多かった。当然ながら、医学科学生には「医学の専門書・専門雑誌を増やしてほしい」との声が少なくなく、看護学科学生には「看護学の専門書・専門雑誌を増やしてほしい」と回答する者が少なくなかった。

また、学科を問わず低学年を中心に、「一般書・一般雑誌を増やしてほしい」「新刊書・ベストセラーを増やしてほしい」との声が極めて多かった。しかし、それら一般書・一般雑誌・新刊書・ベストセラーのジャン

ルとなると、希望は多岐にわたった。

学科・学年を問わず、「古い図書が多いので新しくしてほしい」と指摘する学生も極めて多かった。さらに「CD、DVDを増やしてほしい」とする学生も少なくなかった。

他方、研究者(教員・大学院学生)の中には「電子ジャーナルを増やしてほしい」との声が少なくなかった。また、学生・研究者双方に「本学図書館は医学専門図書館なので一般書は不要」とする意見が散見された。

### (3) 図書資料のメンテナンスと除却について

少数ではあるが、学生から「表紙カバーを付けたままの配架を」、「図書の日焼け対策を」、「図書の修理を」など、メンテナンスに関する意見・要望が寄せられた。いずれも図書館を頻繁に利用している者に多く、図書資料に対する深い愛着が感じられる。また、「卒業生から教科書を寄付してもらい貸出を」など、図書資料の末永い有効活用のためのユニークなアイデアも散見された。

### (4) 図書館の建物について

学生・研究者を問わず、「全体的に狭いので広く」、「改修・改築・増築を」などの声が少なくなかったが、これらは膨大な予算措置を必要とするので、実現を目指すには長期的展望に立つ必要がある。

### (5) 館内の施設・設備について

様々な施設・設備について多岐にわたる意見・要望が寄せられた。学生からは、増やしてほしいものや新たに設けてほしいものとして、座席、セミナー室、自習室、ソファ、飲食スペース、私物用ロッカー、検索用以外のパソコン、検索データ印刷用プリンター、コピー機などがあつた。看護職員からは「光を浴びてゆっくり本を読めるコーナー」、「学生の学習だけでなく調べものにも適応した場所」を求める意見が寄せられた。

### (6) 図書の配架システム・検索システムについて

学生からは、配架の仕方がわかりにくく図書を探しにくいという意見が少なくなかった。「英語と日本語に分けて配架せよ」、「同一の雑誌は同じ場所に一括して」、「天井から案内板を吊るせ」など具体的な改善意見も少なくなかった。

### (7) 印刷機器について

上記の(5)と重複するが、検索用パソコンに関連して、それと「連動したプリンターを設置してほしい」との声が学生を中心に多数寄せられた。コピー機に関しては、「2階にも設置を」、「24時間利用できるように」、「費用を廉価あるいは無料に」などの声が学生・研究者双方から多数寄せられた。

### (8) 電子化推進について

主に研究者から、「学外からの電子ジャーナル閲覧を可能に」、「電子ジャーナルのPDFファイルをダウンロードできるように」、「ネット回線を速く」、「JCR(インパクト・ファクターによる学術雑誌の引用統計指標)を教室のパソコンからも見られるように」、「全面ICタグ化で図書管理の強化を」、「世界的な連携でリポジトリの強化を」などの要望が出された。

### (9) 図書資料の貸出について

多くの学生から「貸出期間を長くして」、「貸出冊数を増やして」、「CDやDVDや辞書なども貸出してほしい」という要望が寄せられた。とはいえ、借入待機者との兼ね合いもあり、モラルを守らない利用者の増加も懸念されるので、これらの要望の実現を目指すべきかどうかについては、広い視野からの検討が必要であろう。

### (10) 利用者モラルの向上のための方策について

頻繁に利用する学生から、「座席の占有を取り締められ」、「私語を取り締められ」、「飲食禁止の徹底を」、「図書を正しい位置に戻すよう取り締められ」、「貸出期限切れの人に督促強化・罰則強化せよ」などの要望が出された。これらは、図書館を真面目に利用している学生が迷惑している、という切実な声と受け止められる。

(11) 利用規制の緩和について

前項とは逆に、少数ながら、利用規制の緩和を求める声も学生から寄せられた。「飲食を許可せよ」、「国家試験対策の6年生の座席専有を認めよ」などである。

(12) 図書館職員の対応について

対応を肯定的に評価する回答者が多かったが、他方、学生・研究者(教員・大学院学生)・看護職員・その他の職員を問わず、さまざまな批判的意見も寄せられた。例えば、「わからないことを気軽に聞ける雰囲気」、「職員の私語がうるさいので善処せよ」、「もっと企画の広報を」、「他大学で研修を受けよ」、「著作権について学生・職員に啓発し、むやみにコピーをさせるな」などである。

(13) 学内他部局および学外機関との連携について

学生から、「学内所蔵文献を図書館で借りられるシステムを構築せよ」、「市内の図書館と連携し蔵書の取り寄せや貸出サービスを展開せよ」といった要望が寄せられた。

(14) 館内の環境整備について

頻繁に利用する学生を中心に、多くの要望が強く寄せられた。その主なものとして、「強すぎる暖房を抑えよ」、「冷暖房を適温に整備せよ」、「加湿器を備えるなどして湿度管理をせよ」、「照明・内装が暗いので個人用照明をつけるなどして明るくせよ」、「空気が悪いので換気せよ」、「窓に虫がいるので除去せよ」、「配管からの騒音を抑えよ」、「トイレを清潔にせよ」、「トイレに石鹸・ペーパーを常備せよ」、「トイレの水道を自動にせよ」、「パソコンのキーボードがベタベタするのできれいにせよ」、「咳をしている人にはマスク着用を義務付けよ」が挙げられる。

(15) 古文書展示企画について

平成19(2007)年8月から図書館入り口付近のコーナーで半定期的に実施している古文書展示(杉田玄白『解体新書』現物、山脇東洋『蔵志』現物、レオナルド・ダ・ヴィンチ解剖図譜複製など)に関しては、回答者から肯定的評価が極めて多かった。

(16) その他

根本的な問題として、研究者から、そもそも図書館の予算が少ないとの指摘があった。

### 改革のグランドデザイン

以上の ~ に示した関連文書等およびアンケート結果を踏まえるとき、本学の図書館機能を充実させ、図書館サービスを向上し利用者環境を改善し、本学の教育・研究・医療を支える体制を整備していくには、以下の改革が特に重要であると考えられる。施設・設備・利用環境、図書資料、サービス・広報活動、地域連携、その他の観点に区分した上で提示していくことにするが、その前に、それらの優先順位をどうつけるか、また経費をどうするかに触れておきたい。

(1) 改革の規模・経費と優先順位

大前提としてまず確認しておきたいことは、本学図書館の利用者のうち最優先に意見・要望を考慮しなければならないのは、第一に、学習する学生であり、第二に、研究に従事する研究者(教員・大学院学生)および大学院学生である。基本的には、学習用図書資料は学生の声を踏まえたうえで整備し、学術雑誌(電子ジャーナルを含む)や学術データベースは研究者の要望に応えるかたちで整備しなければならない。そこには確固たる選書ポリシーが必要なことはいうまでもない。しかも、における文部科学省からの関連政策文書の精神と矛盾しないよう留意し、図書館専門家によって成書の形にまとめられた意見には謙虚に耳を傾けるとともに、本学教育改革のグランドデザインとも整合性をもたせる必要がある。

さらに、以下の改革の実現は、図書館に割り当てられている限られた予算内だけでは賄いきれないことは明らかである。図書館関係者(図書館長、図書館委員会委員、図書館職員)が一体となって競争的資金や寄付金・寄贈品の獲得に努力を傾注していく必要があるのはいうまでもないが、学長裁量経費からも応分の支出をお願い

いいたい。

また、利用者の立場によって相互に矛盾し、それぞれの立場のうちでも矛盾するような意見・要望をかなえていくには、優先順位をつけなければならない。当面の約5年間は、本学における建学の理念である「地域医療に根ざした医療、福祉の向上」に沿える学習用図書資料・利用環境の整備や研究者が研究をさらに活性化できるように支援するための学術雑誌（電子ジャーナル含む）や学術データベースの充実に重点的に努めたい。

## （2）施設・設備・利用環境の充実・向上

### 閲覧・学習スペースの充実

本学図書館が現在地に竣工したのは昭和53（1978）年である。それ以来、総面積は基本的に変わっていない。図書資料は書庫スペースに合わせて毎年除却を繰り返してしているが、雑誌のバックナンバーは年々増え続ける一方である。学生数も、入学者の定員増や看護学科の設置等により増加の一途をたどってきている。しかも、当初は存在しなかったパソコン等の機器に割くスペースも必要となってきた。電動書架を導入するなど努力してきたが、閲覧・学習が圧迫され当初と比べかなり手狭となっているのは否めない。

このような状況にあって、学生の要望の上位にあがっているのが閲覧・学習スペースを増やしてほしいという点であることは当然といえよう。むろん図書館の全面改修・改築・増築などについて関係各方面へ要望していくが、さしあたり現実的な対応として、電動書架に保管された最古の学術雑誌バックナンバー群を図書館外に移転すること、および、既存の図書資料書架スペースを一層有効活用すること、さらに、図書館1階入口付近のロビースペースを図書館内に繰り込むこと、以上の3点の検討によって閲覧・学習スペースを充実させることが急務であると思われる。さらに将来的には、以上に加え、学生にとってより利便性の高い利用スペースの確保も目指したい。

### グループ学習スペースの充実

グループ学習スペースとして、現在はセミナー室が1つしか確保されていない。図書館内にセミナー室を増やすために、隣接する視聴覚室スペースの縮小を検討することは、今後の実用英語・医学英語教育の充実をうたった教育改革グランドデザインの趣旨と矛盾することになる。セミナー室の確保は、学生の学習環境の改善という観点と関係する部署との連携により検討することが望ましい。また、図書館1階入口付近のロビースペースを活用してセミナー室を設けるのも一案である。これは予算措置次第では実現可能である。

### 検索用パソコンの充実

平成19（2007）年9月に8台のパソコンを追加配置した。これで館内には合計29台が整備された。1階閲覧室に「インターネット・情報検索コーナー」を設置し、16台分は独立スペースとした。今後の台数確保や機能拡充のためには、利用者の要望により、本コーナーの在り方やパソコン等の設置について検討を続ける。

### 書庫スペースの確保

年々増え続ける雑誌バックナンバーが館内書庫スペースを圧迫している。利用の少ないものは図書館外の本学施設に移転する必要がある。その移転先としては現在改修計画中の医大宿舎E棟が有力である。各部署からの様々な資料保管庫として計画されているところであるが、図書館としてもその恩恵に与りたい。ただし、移転後も利用希望者のニーズに対応できるように、必要なナンバーを書庫から迅速に取り出して提供できるシステムを構築する必要がある。また、この移転が実現すれば図書館内スペースを有効活用できるため、前述の「閲覧・学習スペースの充実」の実現性が高くなる。

### 衛生環境の飛躍的向上

本学図書館は有人時・無人時あわせて365日24時間にわたって開館している。常に利用者の出入りがある。そのため環境衛生には特段の注意を払わなければならないが、従来、その対応は十分でなかった。利用者の意見・要望にも多かったが、温度・湿度・換気の適正化、照明の改善、窓の清掃強化、トイレの衛生状態の改善（石鹸・ペーパーの常備と水道の自動化）を早急に図りたい。特にトイレの衛生状態の改善はノロウイルスその他の病原体の蔓延を防ぐ意味からも喫緊の課題である。保健管理センターの指導を仰ぐとともに、同センターとの不断の連携により衛生環境の整備に一層努めたい。



### (3) 図書資料の充実

#### 学生用図書資料の充実

##### ) 学生用参考図書・学生購入希望図書などの充実

学生の学習活動のための図書資料（特に医学・看護学を中心に）の充実を図る必要がある。一般書ではなく、医学・看護学関連の資料である。とりわけ、進境著しい医学・看護学分野では、新刊図書を補充し続ける予算措置が必要である。また、古い図書資料は読者に有害な情報や誤った情報を提供する結果にもなりかねないので、専門の職員による不断の点検と果敢な除却も喫緊の課題である。古いものは常に新しいものと交換されていく必要がある。さらに、医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議の報告書にうたわれている「腫瘍に関する体系的教育」の推進に役立つ資料は、早急に充実させる必要がある。

##### ) 新書・文庫などの廉価本の充実による新情報・新知見のスピーディな提供

アンケート結果を精査すると、特に低学年の学生からは、新刊書・ベストセラーの購入を望む声が強かった。しかし、医学部の専門図書館という性質上、また予算上、そうした要望には応じにくい。低学年の学生には不満が残るであろう。しかしながら、その不満をある程度まで解消するための方策として考えられるのが、廉価であり、なおかつ読者のニーズに臨機応変に対処できるという特性を持つ新書本・文庫本の定期的な大量購入である。特に、医学・看護学を含めた生命科学系の新書・文庫本を充実させることにより、この方面の多様な新情報・新知見をスピーディに提供することができる。また、一般教養書の不足も廉価な新書・文庫によってカバーすることはかなりの程度まで可能である。

##### ) 地域医療書コーナーの整備・充実

本学の教育目標・目的の最大の柱が地域医療への貢献である。本学が「競争的環境の中で個性輝く大学」として生き残れるか否かもこの一点にかかっていると見て過言ではない。本学教育改革グランドデザインによれば、平成21年度からの医学科の新しいカリキュラムの一環として「地域医療学（論）」の導入も検討されている。図書館改革も、当然、このカリキュラム改革と連動して展開すべきものである。

図書館では既に平成19（2007）年10月に、「地域医療書コーナー」を2階閲覧室に設置した。今後は、このコーナーの図書を購入するための経常的予算を確保するとともに、北海道内各自治体および近隣県各自治体に定期的に関連図書の恵贈について協力を仰ぐことも積極的に行う必要がある。平成20（2008）年1月に道内の主要自治体に寄贈協力の依頼文書を試行的に送付したところ、多数の図書が寄せられた。

##### ) 選書ポリシーの確立

本学は医学部医学科・看護学科のみから構成される大学である。そのため、選書の基本は、学生が医学・看護学を学び教員がそれらを教育するための図書資料を収集すること、及び、研究者が医学・看護学系の雑誌や関連学術データベースを十分活用できるようにすることにある。しかし、従来、学生用図書の選書に対しては場当たりの対応が少なくなかった。ともすると、教育担当者の興味・関心や趣味に基づいて購入しがちであった。とはいえ、学生の声にあまり耳を傾けすぎると、声高な学生の要望が優先されかねない。いずれにせよ選書に偏りが生じる。今後は、他大学の状況なども参考にしながら、各分野の必要不可欠かつ定評のある基本図書を、図書館委員会と図書館職員が中心となって系統的に揃える努力もする必要がある。また、本学の特徴的教育方針に沿うような指定特定分野の資料を重点的に配備する選書方針の確立も検討する必要がある。また、学生から要望を聞く場合には、申請書に当該図書の購入を希望する理由を明記させ、審査を厳しくしていく必要がある。このような選書ポリシーの確立が急務である。

他方、学術雑誌の多くについては、紙媒体・電子媒体を問わずその利用目的は研究用である。従来どおり、研究者主体で選んでいくことが肝要である。従来から、継続購入雑誌・新規購入雑誌および購入中止雑誌の決定は全学的なアンケート調査を行ったうえ図書館委員会で公正に決定している。今後もその方針を堅持していく。

#### 研究者用電子資料の充実

##### ) 電子ジャーナルの充実

図書館として、研究者（教員・大学院生）のための学術雑誌の充実を図るべきはいうまでもないが、今後は特に、利便性の飛躍的な向上を目指して、国内雑誌の電子ジャーナル化を積極的に推進する。また、普及しつつある電子図書（eBOOK）の導入も検討する。他方、外国の電子ジャーナルは年々高騰を続け

ており、国立大学協会でも、文部科学省に対して対策を要望してはいるが、今後、場合によっては、購入を打ち切らざるを得ない雑誌やパッケージが続出し、研究に支障をきたすおそれもある。この点については本学図書館を利用している同窓会関係者などから積極的な支援をお願いすることにしたい。

#### ) 学術データベースの充実

現在、本図書館には、情報検索の有力な手段として利用できる学術データベースが数種あり、それぞれ学習・教育・研究・診療に有効活用されている。それらの目的に加え、近年では、研究評価、業績や特許等の知的財産の加工や管理という多様な利用が可能なデータベースも出現してきた。そのため、大学運営やその意思決定にもその種のデータベースは重要なものとなりつつある。その典型が SCOPUS (エルゼビア社) と Web of Science (トムソン社) である。

平成20(2008)年1月には、図書館が主催して、利用トライアル中の SCOPUS と Web of Science の利用説明会を開催した。参加者を中心に本格導入への学内世論が盛り上がりつつある。両データベースには一長一短があり、導入をどちらか一方に決めるのは困難であるが、当該学術データベースを導入している他の大学などの状況を参考にしながら、何が最良の選択かを判断し早期に導入することが望まれる。なお、その他の学術データベースについても必要に応じて検討を行う。

#### (4) サービス・広報活動の充実

##### 図書館利用規程等の検討

多くの学生が要望している貸出資料増加には、1回の図書貸出冊数を増やすという意味合いと、貸出該当資料を従来の図書に加えて「禁帯出」の辞書、CD、DVDなどにまで拡張するという意味合いとが含まれている。さらに、貸出期間延長の要望も根強い。しかし、これらの要望に応えることには一長一短がある。貸出期間を長くすると借入待機者の増加が予想される。また、特に辞書は多くの人の利用に供するものであり、一部の人に占有させるのは公平を欠くことになる。CDやDVDにも相当数の待機者が出るのが予想される。しかも、下記の 1 に示すように利用者のモラルが年々低下していることから、これらの要望は要望として受け止めつつも、慎重に対処する必要がある。

これらの具体的な要望についての図書館の対応方針を明確にし、また、多様なサービスや利用者を受け入れるためにも、図書館利用規程等の見直しを検討する。

##### 利用者モラル向上のための啓発と新たなペナルティの検討

前記でも指摘したように利用者のマナーは年々低下してきている。返却の大幅な遅延、図書の紛失、図書への書き込み・切抜き、館内での飲食や私語などである。24時間開館サービスが学内構成者だけのものから学外者へも拡大しつつある現状において、この事態は深刻に受け止めなければならない。図書資料に関する公共性や貴重性に関する認識不足を早急に是正することが図書館の有効で円滑な利用を促進することになる。図書館の利用マナーや規定の遵守について改めて啓発を図ることが肝要である。

モラル向上への要望は、教職員の声というより、真面目な学生の声であることを踏まえ、学年担当教員や教務・厚生委員会と連携し、対策を講じていく必要がある。ただし、強圧的に押さえつけるのではなく、あくまでも学生教育の一環として行うことが肝要である。ペナルティ強化は、規定遵守の成り行きを見たくて検討したい。今後は本学の規程等の追加・変更も視野に入れて対処したい。

##### 図書館情報課職員によるリテラシー教育の充実

近年、学生に対する学習支援のみならず研究者に対する研究支援においても、学術情報リテラシーはその重要性を急速に増してきている。図書館で接することのできる資料・情報(メディア)が急激に多様化・高度化してきているからである。このことが、多くの大学において図書館および図書館職員の生き残りのアピール材料となっている。本学も例外ではない。よりの確でより充実したリテラシー教育を目指し、内容や方法について改善を図っていききたい。担当する職員には、教員としての位置づけもなされるべきである。すでに図書館情報課職員の2名には「学内特別講師」の称号が付与されている。名実ともに教育者として、当該教育の質・量の充実に向けて活躍することが期待される。

## 展示事業の推進

平成19(2007)年8月開催のオープンキャンパスでは、『解体新書』『蔵志』等4点にわたって江戸時代の貴重な解剖書の現物(鮫島夏樹本学名誉教授所蔵)を館内に展示した。それらの一般公開を経て、10月には、レオナルド・ダ・ヴィンチ解剖手稿(複製)の展示を実施した。アンケート調査の結果に明瞭に現れているように、これらの企画はいずれも学生から好評を博した。本学には、いわゆる貴重図書やお宝的資料はほとんどないが、特集を設定したりタイムリーな話題に即した工夫をしたりすることによって図書資料に親しんでもらうことは、文化遺産としての図書(所蔵・非所蔵を問わず)の再認識という観点から極めて有意義である。今後は、他大学の図書館や国立国会図書館が所蔵する貴重書の展示なども、関係各位の御支援・御協力を仰いだうえで実現したい。

## ホームページなど図書館ポータルの充実

図書館ポータルとは、図書館利用者が、学術情報を含め図書館の提供・サービスするツールや資料にアクセスするための最初のポイントである。典型的な例として図書館ホームページが挙げられる。これは、OPAC(図書館蔵書検索システム)・オンラインレファレンス資料・電子ジャーナル等の学習・教育・研究・診療資料のほか、電子メール・相互利用サービス等も含め、この充実に努める。これは、情報チャンネルというユニットで、内外部情報源へのアクセス機能を持つ。多くの改善点を指摘されている図書館ホームページについては、今後、全面改修を前提に、まず、利用者アンケートを実施する。図書館ポータルの充実については、「科学技術基本計画」(文部科学省平成7年11月制定)にも推進の指摘がある。なお、図書館ホームページを全面改修する際には、日本語版だけでなく英語版も作成する。

## その他の図書館サービスの検討

図書館内における、特にカウンターを中心に展開される利用者サービスについても、利用者の利便性を一層高められるよう、工夫と検討を進めていく。

## (5) 地域連携の推進

### 地域医療機関への文献情報提供の充実

現在図書館は、市内関連5病院への図書・文献情報提供サービスを行っている。本学が目指す地域医療充実のため、道北医療の中心的存在をサポートするためにも、今後は当該サービスの範囲の拡大について検討する。

### 地域医療従事者への24時間開放の推進

平成19(2007)年6月から11月まで実施した試行は順調であり、試行終了直前に登録者にアンケートを実施したが、特に本実施へ向けて決定的に障害となる事項はなかったため、12月から本実施に入っている。しかし、全く検討要素がないというわけではない。アンケートからの様々な意見の中に、導線の長さに対するものがあり、快適かつ安全な運用のためには今後の推移を見守りつつ、特に大学の現在の環境やセキュリティに係ることは改善に努める必要がある。

### 旭川市図書館との連携

本学図書館は基本的に医学部の専門図書館である。したがって専門書の充実を最優先すべきであることはいうまでもない。しかしながら、一般書を増やしてほしいという要望も低学年を中心に根強い。費用対効果を考えると、購入費用は捻出できにくい。また、学生の興味・関心が多岐にわたるため、予算を取ってもすべての学生のニーズに応えることは到底不可能である。とはいえ、身近に一般書がないと「幅広く豊かな教養」(大学設置基準)がおろそかにされ、教養の乏しい人間に育つ懸念もある。

そこで、今後は、一般書を50万冊以上所蔵する旭川市図書館との連携を積極的に推進したい。平成19(2007)年12月以降、旭川市図書館と本学図書館の相互訪問において、両館の館長の話し合いで、当面両館が実現可能なサービスを試行することにより今後の連携内容の選択とその可能性について検討を開始することとなった。想定される相互連携の形態は、旭川市図書館の提供する貸出サービスにより本学が恩恵を受け、本学の派遣講座を旭川市図書館が主催する講演会で実現することなどである。

また、その連携により、旭川市図書館を利用する一般市民に、本学図書館とその蔵書の利用を促進するこ

とも期待でき、地域貢献への一助ともなる。

## (6) その他

### 学術機関リポジトリ (AMCoR) の充実

本学では平成19(2007)年2月28日に機関リポジトリを立ち上げた。2年目を迎えた学術成果リポジトリ事業は、図書館情報課が推進の端緒を開きつつも、実務組織としての学術成果リポジトリ推進支援室、審議・決定組織としての学術成果リポジトリ委員会による推進体制が基本となっている。その経緯は「旭川医科大学学術成果リポジトリAMCoRの構築」(医学図書館 54巻4号 2007年)に事例報告として詳細に記載されている。本件に係るグランドデザインの内容については、両組織における検討と審議を待って別に策定することとし、ここでは扱わない。

### 図書館職員の研修・研鑽の充実

図書館運営の企画・立案を行い、実施の主体となる図書館職員については、今後も積極的な研修参加の機会を得て、継続的な育成を行う。また、図書館職員の学外研修・研鑽の機会を増やすとともに、日頃から知識の習得と意欲向上に努めることが今後は一層必要となる。

### まとめ

以上のとおり、改革すべき課題は多岐にわたるが、学生および研究者双方の図書館へのニーズは高まることはあっても決して低くはならない。そして今後、大学間はもちろん、図書館間における競争的環境もいっそう強まるであろう。したがって利用者からの様々なニーズや図書館を取り巻く諸環境へ十分対応できる体制や体質を強化する必要がある。さらに、提供サービスの充実や新事業へ取り組むためにも、常に適切な予算措置を行っておくことも求められる。本学図書館がその個性を活かしながら最優先で取り組むべき課題は以下の事項であることを確認し、まとめとする。

- (1) 閲覧・学習・書庫スペースを確保し、冷暖房・換気を含めた衛生環境を充実させ、図書館の施設・設備、利用環境を整備・向上させること。
- (2) 学生のための学習用図書・地域医療書や、研究者にとって研究・診療に不可欠な雑誌資料(電子ジャーナル含む)や学術データベースを整備・充実させること。
- (3) 学術情報リテラシー教育支援の充実や図書館ポータルの上昇を図り、図書館の有効活用について広報する機会や図書館の事業を周知する機会を増やすように努めること。
- (4) 旭川市図書館との連携を図り、一般教養図書などに対する要望に応えるとともに、地域社会に一層貢献すること。
- (5) 図書館サービス全般を支える図書館職員の研修や研鑽を強化し、意欲や志気の高揚に努めること。

本グランドデザイン策定スタッフ(本学図書館委員会委員、50音順)

石川一志 伊藤 亮 小川 聡\* 葛西真一\* 加藤剛志\* 黒田 緑\* 田中 剛  
福田耕司 藤尾 均(委員長)\* 本間龍也\* 松田光悦

( \*は策定ワーキンググループメンバー )